

経営倫理士の目線で古典を読んでみた♪

～古典から学ぶ経営価値四原理システム～

経営倫理士コンソーシアム

代表幹事

北村和敏

第6回投稿（2025年12月25日）

『復活』トルストイ（上）



今回紹介するのは、レフ・トルストイの『復活〈上〉』です。トルストイと言えば『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』も有名ですね。どちらも映画化されています。特に『アンナ・カレーニナ』の映画の表紙はじつに見事でした。アンナが蒸気機関車をバックに映っているポスターが妙に印象に残っています。まさに19世紀の後半、ロシアの産業革命を象徴しています。トルストイが生きた時代はロシアにとって大激動の時代だったようですね。

トルストイのニックネームは「ティーチャー（教師）」と言われています。そのせいなのか『復活』の内容もダイレクトにトルストイの思想を読者に教えている節がありあります。ザックリ言うと、トルストイの思想は「反権力・非暴力主義」ですよね。まあ、このあたりは読者によっては好き嫌いがあるようですが、人間として持つべき倫理観の大切さは伝わってきます。

トルストイが生きた時代、ロシアは西欧から遅れて産業革命、そして資本主義が入り込み、貧富の差が拡大していたようです。農奴解放が1861年に施行され、農村部から都市への人の移動もあったようですね。社会の基盤が大きく変わろうとしていた時です。しかし、急激な変化についていける人と、それができない人が出てきますよね。そして富を持つ者と持たざる者の格差は社会不安を煽ったいたようです。資本主義の負の側面が大きくなっています。法整備が追いつかない中での資本主義の拡大はモラルハザードの元凶にもなったようです。ロシア人が従来から持っていた社会性や人間性（人権）に悪影響も出た、出たというよりも価値観の変化が起こったのでしょうか。

トルストイにとっては、近代資本主義に犯されていく姿は見るに堪え難かったのでしょうか。そして今のロシア正教の教えでは民衆は救われないと感じたのでしょうか、トルストイは異端的キリスト教思想（神＝自分）を破門覚悟で小説の中で展開していきます。まさに天才ですね。世の中の矛盾に流されることなく、正論をもって抗います。そしてトルストイは言いますよね。神は自分の中にあると・・（驚愕）。

トルストイの思想にハマっている日本人は、このあたりに共感を持っているのではないでしょうか。どんなに自分で騙そうとしても騙せないものがある、それは良心という善の心が働くことを訴えていますよね。「神＝自分」は何を意味するのか。どんなに環境が変わっても良心と言う核が心の中にあることを言わんとしています。キリスト教の教義が分からぬ日本人にとってトルストイの思想は腹落ちします。そうなのです。トルストイはまさに性善説で人間を捉えているようです。どんなに資本主義が蔓延ってもロシア人の心の中にある利他心や共感・共鳴の感情は失われないという信念に近いものを感じます。

トルストイの名言集を YouTube で見たのですが、人間の真価についての言葉は素晴らしいですね。「人間の真価は分数のようなものだ。分母は自己の評価、分子は他人による評価である。分母が大きくなるほど、結局、真価は小さくなっていく」と言及しています。資本主義は、ややもすると経済性を優先するあまり、自利的・利己的、さらには自己中心主義に陥ります。これでは人間の価値は小さくなります。分子を大きくするためにには社会性や人権への配慮は不可欠ですよね。利他的な行動をとり、他者への共感と共鳴の姿勢は外せないはずです。

そうなのです。この考え方は現代の経営者にも言えることです。資本主義の檻の中では、水が高いところから低い所へと移動するように、トルストイが言うところの分母の増大が起ります。経営者はいつしか目的（ミッション）を忘れ、手段（利益）を目的化し過ぎて社会からの信頼を失います。そうなりたくないければ常に公共性に配慮し、謙虚さを保つ努力が必要ですね。分子を大きくすることを意識することで経営者の社会的価値は増大していきます。トルストイの名言は現代経営者的人格の真価を問う言葉に聞こえてきますよね。人間の真価を分数に例えるあたりは実に秀逸です。

性善説の話のつもりがトルストイの名言から現代経営者的人格のあり様に飛んでしまいました。さて、トルストイは性善説への思いを、この『復活』の中で、主人公ネフリュードフを通して伝えたかったのでしょう。ネフリュードフは学生時代に持っていた純朴な道徳心だけでは社会で生きていけないことを友人たちに言われます。「お前のそのバカ正直さ

が駄目」なんだ攻撃を湯水のように浴びせられ、いつしか「自分自身を信じることをやめて、他人を信じるようになった」と回想しています。自身が持っていた善を他人の悪が凌駕していく感じですね。悪は魅力的なのでしょう。トルストイにとって、ネフリュードフは特別ではなく、誰もが悪に染まっていく平均的な人間として扱っているように感じます。

「性善説」で思い出したのですが、今から2500年程前の中国にたくさんの思想家が生まれます。時代は春秋戦国の群雄割拠の動乱の中、生き残りをかけた諸侯たちの闘争が続きます。まあ、そんな中、諸侯たちの知的な参謀というか、コンサルタントとして思想家たちは活躍しています。俗にいう諸子百家の時代です。

まず、「性善説」と言えば孟子が思い浮かびますよね。人間は生まれながらにして善の心を持っていると主張します。善は人間の中に内在する天の理法だと言いました。しかしその善の心を持つ人間の中に目や耳を通して外部から悪が侵入し、悪に犯された善人は悪人となっていくと言うのです。今回の『復活』でも主人公のネフリュードフは「自分自身を信じることをやめて、他人を信じるようになった」とあります。もともと善の心を持っていたネフリュードフが世間の悪に染まって放蕩尽くしの青年になり果てます。

この『復活』におけるトルストイの思想は孟子の思想と近いですよね。もともと善の心から人間が始まっている以上、なにかのきっかけで心の奥にある善が蘇ります。トルストイはネフリュードフに言わせています。「内部に宿っていた神が、彼の意識の中で目覚めたからである。自分の中に神を見た」と。「彼の内部に宿っていた神が、彼の意識の中で目覚めたからである。彼は自分を神と感じた。自由、勇気、生の喜びを感じただけでなく、善の力を感じた」と言及しています。トルストイの思想も孟子の「性善説」であるのは間違いないようです。基本的に人間の本性は善であることを小説『復活』を通して読者に訴えているようですね。

孟子の「性善説」についての余談になりますが、中国の春秋戦国時代の諸子百家には実際に個性的な思想家たちがたくさん出てきます。孟子は「性善説」を唱えましたが、荀子は「性惡説」を唱えています。基本的に人間は悪で出来ているというのです。悪は人間に内在する天の理法だというのです。成長するにしたがって外界にある善が入り込み、悪が押し込められていくというのです。孟子の思想とは真逆です。さらにこの荀子の弟子がある有名な韓非子です。韓非子の「性惡説」は強烈です。人間の悪は徳をもっても良くならない。だから法律で縛っていく法治国家でないといけないのだと言い出します。まさに徳治国家の否定です。この韓非子の思想を絶賛したのが中華を統一した秦の始皇帝です。愛読書は言わずもがな『韓非子』ですよね。この『韓非子』の思想がよく現れているフレーズ

があります。「虎は犬より強い。なぜなら虎は鋭い牙と爪をもっているからだ」と。秦の始皇帝の思いに、ぴったしカンカンだったようです。しかし人の善を信じなかった秦帝国はわずか15年で滅び、その後の漢帝国は法治と徳治をミックスしたガバナンス体制を取つていきます。中庸の大切さを歴史は教えてくれていますね。

「性善説」や「性悪説」以外にも面白いところでは、楊子は、人間は生まれながらにして善と惡がもともと混じり合っているとする「善惡混合説」を説いています。さらに告子は、人間はもともと善でもなければ不善でもないという「白紙説」を説いています。他にもたくさんありますが、諸子百家とはよく言ったものです。思想家たちの言いたい放題つて感じもしますよね（笑）。余談の話ばかりになってしまいました。次回の『復活（下）』の感想でネフリュードフの人間としての倫理的成長について取り上げます。（北村）